

＜書 評＞

J.B. de Quirós 他著

鷺田孝保・他訳（国立療養所東京病院付属
リハビリテーション学院）

学習障害児のリハビリテーション

本田 哲三（慶応大学）

現在のリハビリテーション医療において、学習障害児（Learning disabilities）への治療は未だ有効な方法論の確立していない分野の一つである。

従来の小児神経学中心のアプローチは、重篤な脳障害の診断は可能であっても「微細な」（minimal）障害の評価には必ずしも有用ではなかった。

著者 de Quirós 博士らは、本書において学習障害に対する神経心理学的視点の重要性を提起している。

本書の特徴は次の諸点にあると考

えられる。発達理論に関しては、(1) 学習能力は身体運動に依存する点に着目し、その基礎となる姿勢とバランス、特に前庭機能の影響を重視する。(2) 人間特有の象徴的コミュニケーションを「リング」と名付け、言語学習における key concept として位置づけている。さらに、学習障害の原因として、(1) 高次神経機能障害（読字障害、不全失語、行為失認症）(2) 視聴覚障害、(3) 前庭—固有感覚解離（姿勢の抑制を困難にし「落ちつきのなさ」をひきおこす）(4) 前庭—動眼分裂（眼球の巧緻性が障害

され、読字能力が低下する）もあげている。

本書では、前庭障害に対する神経心理学的検査など、“The Medical Center of Phoniatric and Audiologic Research” 所長である著者のユニークな理論が随所に展開されているが、具体的な治療方法については細かく触れられていない。そのため現場スタッフが、マニュアルとして用いるには十分ではないであろう。さらに、extracharge—特別電荷、inertia—慣性、laterality—ラテラルITY、remnant signs—残遺物徴候、などの訳語も適切ではなく、本書をより難解なものにしている。

以上、若干の問題を有するものの、本書は学習障害に対する貴重な示唆に豊んでおり、教育関係者のみならず、一般リハビリスタッフにも一読の価値があると考えられる。

（B 5，頁182，1982，¥5,800，
医歯薬出版刊）